

～子どもの可能性を信じて～

「育てにくさを感じる子どもとの 関わりを考える」

日時 2017年3月4日(土)
午後1時30分～午後4時
場所 大河原町世代交流いきいきプラザ
「多目的ホール」
(宮城県柴田郡大河原町大谷字末広50番地の1)

入場無料(定員150人)です。
事前申込は必要ありません
大河原駅(東北本線)徒歩10分です。

※ 駐車場はありますが、台数に限りがあります。
できる限り公共交通機関での来場をお願いします。

第一部 講演(午後1時30分～午後2時15分)
「夢と志を育むために — 福祉が目指す人間の尊厳とは —」
講師：岩手県立大学教授 三上邦彦

第二部 パネルディスカッション(午後2時30分～午後4時)
【パネリスト】

三上 邦彦(岩手県立大学教授)
川越聡一郎(臨床心理士、保育士)
川上 芳夫(スクールソーシャルワーカー、精神保健福祉士)
※司会進行 小熊昭広(詩誌『回生』)

シンポジウム

キーワード ネグレクト(不適切な関わり), 子育て, 発達障害, 自立
不適応不, 不登校, 引きこもり, 自信, 振り返り, 肯定

主催 詩誌『回生』 (URL: <http://www.poetic.jp/kaisei> Mail kaisei@poetic.jp)
問合せ先 宮城県柴田郡大河原町大谷字原前50の5 小熊方 電話 090-5230-2349

講師及びパネリスト紹介

岩手県立大学教授 三上邦彦



現在、岩手県立大学社会福祉学部人間福祉学科教授。児童養護施設の児童指導員、児童相談所の心理判定員・児童虐待チーム等の福祉現場で20年勤務する。子ども虐待の支援、児童福祉施設の子どもの自立支援について関心を寄せて取り組んでいる。

川越聡一郎（臨床心理士、保育士）

発達障害児支援の自治体の取り組みに積極的に関わっている。今回は、行政の職員とは離れて、臨床心理士個人として発言していただきます。

川上芳夫（スクールソーシャルワーカー、精神保健福祉士）

昨年度末に高校教師を退職、現在はスクールソーシャルワーカーとして精力的に働いている。社会に対してなんらかの不適應状態の子どもの自立を教育と福祉の両面からの支援を実践している。社会福祉士でもある。

開催趣旨

家庭や学校や職場において、子どもとの関わりになんらかの悩みや不安を抱えている方は、少なからずおられるのではないのでしょうか。

詩誌『回生』では、昨年1月に「～若者に希望のある社会に向けて、先進事例に学ぶ～ 不登校、高校中退者の自立、そして子どもの貧困を考えるシンポジウム」という不登校や高校中退を経験した若者達の未来に向けた自立支援に先進的な取り組みを行っているNPO法人の代表者の方にお越しいただき、考える機会を作りました。

小さな会でしたが、親御さんや支援者など多くの方々に御参加いただきました。

今回は、取組みということではなく、子どもの側において子育てとして関わるといった、もっと身近な視点で子どもの可能性を考える機会を作りたいなと思ひ、このようなシンポジウムを開催することにしました。

一番の開催主旨は、子どもとの関わりに自信をなくしそうな、不安を抱いている、子どもの身近で寄り添っている方に、少しでも「大丈夫、これでいいんだ。」という前に進む自信となるきっかけを作りたいなということです。

詩誌『回生』は、大河原町で発行されている詩の雑誌です。今回のシンポジウムは文学とは直接に関係ありません。しかし、詩的行為は社会との関係を抜きにしては考えられないものです。その意味から、詩誌『回生』では、「無意味な意味の尾形亀之助読書会」という詩の可能性を考える勉強会を隔月で定期的開催し、詩に限らず社会の問題についても勉強する機会を持っております。今回の企画も「無意味な意味の尾形亀之助読書会」として開催するものです。

（詩誌『回生』編集同人 小熊昭広）

※ ネグレクトとは、「養育放棄」と訳され、虐待の一形態と理解されることが多いですが、「子どもとの不適切な関わり」というもっと広い意味を持つ言葉でもあります。

どんな人でも、子どもと常に適切な関わりを持てることはできないと思います。

